就職、キャリア見据え「社会変える力に」

仕事と生活のバランスを取り、生き生き働ける職場づくりにはどんな工夫が必要か。この夏、そんなアイデアを競うプレゼンテーション大会が開かれた。参加したのは、これから社会に出ていく中高生たち。働き方改革の定着や人工知能（ＡＩ）の浸透に伴い、働き方が変わりつつある時代。なぜ今、10代が働き方の学びを深めようとするのか。

（山下真）

10代が考える「働き方改革」

4日間の未来会議

長期休暇制度、業務負担ポイント制…



働き方を考える「労働の未来会議2026」に参加した中高生たち
＝8月7日（ワーク・ライフバランス提供）

大会は、8月4～7日にオンライン開催された「労働の未来会議2026」。高校生有志が呼びかけ、長時間労働の是正に取り組むコンサル会社「ワーク・ライフバランス」（東京）とともに主催した。

「私たちの世代は、ＡＩが広がった時代に『働く』ことを心配している人が多い」。実行委員長を務めた高校2年の峯岸泰希さん（17）が思いを語る。人が担う業務をＡＩが代替することに、不安を感じる同世代もいる。どんな仕事が残って、なくなるのか。未来図を描きにくい時代だから、働くことを見つめる場にできれば―。峯岸さんはそんな考えで企画した。

集まったのは関東を中心に、高知県や長野県などの中高生28人。働き方改革の現状に関する講演会、仕事や人生のイベントを疑似体験するゲーム、企業見学などに参加した。そして最終日、政府や企業に提案する働き方改革のプレゼン大会が始まった。

◆　◆

「斬新なアイデアの発想が枯れた…」

中学3年の矢野七海さんは、広告代理店に勤務する親戚の言葉を紹介した。仕事では多彩な着想が求められるが、やりたいことを全てやりきり、キャリアアップに向けて学ぶ時間もないという。

バーンアウト（燃え尽き症候群）からの退職を防げないか。疲れ切った親戚の姿をヒントに、矢野さんが提案したのが「サバティカル（長期休暇）制度」。長く働いた人が数カ月単位で仕事を離れ、アイデア集めや自己研さんなどの時間に充てる仕組みだ。

海外と比べると、日本の有給休暇の取得率は低迷する。矢野さんは「頑張ったからこそ休んでいい。そう意識を変えれば、私生活の充実にもつながる」と呼びかけた。



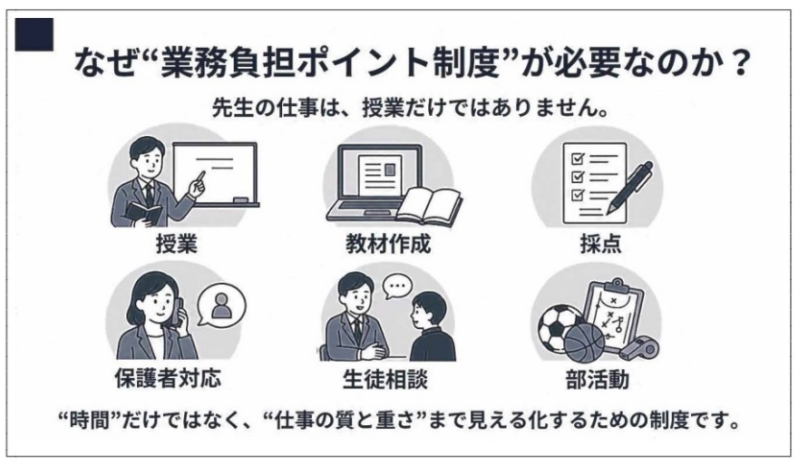
「労働の未来会議2026」の実行委員長を務めた峯岸泰希さん

コンビニ大手、セブンーイレブン・ジャパンの社長を名指しし「コンビニ進化計画」を打ち出したのは、高校2年の岡澤舞依さん。アルバイト不足の解消に、福利厚生など待遇の良さを呼びかける求人案や、ＡＩによるシフト管理を掲げた。「利用者にも経営者にも便利なコンビニになれば」

高校3年の戸田悠豊さんと高校2年の川端爽さんのペアは、日ごろ先生に何でも気軽に相談している状況を振り返った。

「先生は優しいから、すぐ返してくれる。でもどうして僕たちのために尽くしてくれるのか」

教材作成、テスト採点、保護者対応、部活動…。授業だけでなく、さまざまな業務がある。善意の働きが適正に評価されなければ、先生は心身を病んでしまうかもしれない。労働時間と合わせ、業務の負担をポイント化し、仕事量を可視化する仕組みを提案した。



さまざまな業務に追われる先生の負担軽減を提案した、戸田悠豊さんと川端爽さんペアの発表資料

◆　◆

プレゼンを通じ、それぞれの働き方改革を打ち出した中高生。家庭や趣味の時間との両立を重んじ、より効率的に働くことを考える発表が目立った。

「（大人は）仕事のために生きているというイメージがあった」。4日間の学びを終え、戸田さんが振り返る。出版関係の会社を経営する父は、帰宅が深夜になったり、家でも仕事をしたりする姿が日常だった。

「働き過ぎで体を壊すのではと心配することもある。何のために働くのか考えるきっかけになった」

実行委員長として、全員のプレゼンを見つめた峯岸さんは「働き方改革という抽象的なテーマでも、しっかり考えを深めることができた」。参加者にとって進学や就職、その先にキャリアを築くヒントになったと手応えを感じている。

「労働の未来と聞いて『これだ』と思い付く中高生は多くないかもしれない。それでも、少子化などで働き方が変化する中、私たち世代が働き方を考えることはいずれ社会を変える力になる」と語った。

トーク

久留米総局に勤務していた２年前。職場体験に訪れた中学生２人に、新聞社の仕事を案内する機会があった。取材の様子や記事の書き方を伝える中で、２人に聞かれたのは「働くってどういうことだと思いますか？」。真っすぐに向けられた視線を受け、私の方が考え込まされた。

「労働の未来会議2026」に参加した中高生のまなざしも同様だった。夏休みの真っただ中、職場見学やキャリアコンサルタントとの意見交換を重ね、働くことを真剣に議論した。いずれ社会に出て、仕事と向き合う彼ら。働き方を自分の問題と捉える姿が印象的だった。

過度な長時間労働、ハラスメント、ブラック企業…。労働を巡る問題は絶えない。将来、若者が希望を持って働ける環境づくりには何が必要か。中高生の発表は、大きな問いを投げかけている。

（山下真）

(C)西日本新聞社　無断転載、複製及び頒布を禁止します。